

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370433

研究課題名(和文)「W文学」としての村上春樹の小説

研究課題名(英文) Novels of Haruki Murakami as World Literature

研究代表者

森田 典正 (Morita, Norimasa)

早稲田大学・国際学院・教授

研究者番号：50200423

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：「W文学」としての村上春樹の小説群を、「W文学」理論、テキスト分析、受容の三つの観点から研究した。2000年頃より起こった「W文学」理論は、この20年近くの間で確立されたと考えられ、これらを体系的に纏うことができた。テキスト分析については、村上の作品を村上と同時代のポストモダン文学と、戦後のモダニズム文学のテクストを比較することにより、村上の小説の「W文学」的特性を明示することができたのではないかと考える。受容については村上作品の一般読者、翻訳者、研究者、編集者からの聞き取り調査により、「日本文学」としてではなく、ナショナル文学を越え、グローバル文学として読まれていることが確認できた。

研究成果の概要(英文)：I investigated fictions by Haruki Murakami from three focal points - theory of World Literature, textual analysis, and reception study. Theory of World Literature first emerged in 2000 and its foundation has been firmly established by now. I have explored its development in its entirety. I analyzed Murakami texts mainly by comparing them to those of both his contemporary Postmodern novels and post-war modernist fictions. I believe that I have managed to demonstrate the unmistakable characteristics of Murakami's fictions as World Literature. I have also made many interviews to general readers, translators, researchers and editors of Murakami's works and they made it abundantly clear that they read his fictions not as Japanese (national) literature but global literature.

研究分野：各国文学

キーワード：W文学 村上春樹 ポストモダニズム 比較文学 受容論

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 現在、文学概念、また、比較文学の方法論でもある「W文学」は、2000年に発表されたフランコ・モレッティの論文をきっかけにして発達したものである。その後、フランスの文芸批評家パスカル・カサノバやアメリカの比較文学研究者デイヴィッド・ダムロッシュなどがそれぞれの立場から、この概念・方法論は発達・展開し、2000年代後半までには、文学のグローバル化を考察する際のキーワードになっていった。

一方で村上春樹の長編小説は1990年代から海外でも盛んに読まれるようになった。海外において日本人の作家がこれ程までに読まれ、数々の文学賞を受賞し、行動まで話題になったことは、村上以外に例をみない。日本で村上の作品を「W文学」として読み込もうとする試みは、2010年代から垣間見られるようになったが、そこで使われている「W文学」は、モレッティ以前の概念、すなわち、世界の様々な国で、様々な言語で書かれた作品の総称に過ぎなかった。言い換えれば、ある国や地域で生まれた文学形態が、他の国や地域に伝播し、文学作品の創作に応用される際に生起する、「土着」の文学との摩擦や軋轢、そして、そこから派生する始祖の文学形態の変容を考察するという、「W文学」本来の方法論にのっとって研究されているものではなかった。

また、本研究者は2009年に英国ウォリック大学で開催された「W文学」の大会で研究発表を行った他、2011年11月に早稲田大学において「World Literature/Japanese Literature」というシンポジウムを開催した他、その成果を早稲田大学より、単行本として出版した。

## 2. 研究の目的

村上春樹の小説、とりわけ、長編小説は日本人の作品としては、近代、現代の双方を通して、もっとも多くの人によって読まれている。本研究の目的は、単純に言えば、村上春樹の作品が、なぜ、海外でこれほど読まれるのかを、明確に示すことにあった。ただし、それを印象主義的に提示することを目的にしていない。私は村上春樹の作品はグローバル化された世界を映し出している点、また、仮想（ヴァーチャルな）世界、仮想空間などのポストモダン時代の新たな文化形態に想を得た物語世界を構築している点など、典型的なポストモダン小説だと考えている。そこで村上の作品が世界で、日本人の作家の誰よりも読まれるのは、それらがもつ強いポストモダン性、あるいは、グローバル性である、との仮説を立てて、それを証明することを目的としたのである。

村上の作品が海外で読まれる背景として、文化のグローバル化があり、情報の瞬時の拡散、流通の革命的進歩が、いかに文学の在り方に影響を与え、文学の形を変えていったか

について、村上を一種のケース・スタディーとして解明しようとするのも、より大きな目的であった。

## 3. 研究の方法

「W文学」の方法論はフランコ・モレッティに端を発し、パスカル・カサノバ、デイヴィッド・ダムロッシュの著作を経て、クリストファー・プレングアストやアレクサンダー・ピアクロフトらが編んだアンソロジー、そして、エミリー・アプターの「W文学」批判やレベッカ・ワルコヴィッツの「自己翻訳」論を通して、あらかた、出揃ったといえる。

その中から、本研究ではモレッティやカサノバが主に展開した、文学や文化が「中心」から「周辺」に流れる伝播の形態論、また、その間に起こる変化に着目する変容論を批判的に取り入れた。

本研究の方法のもう一本の柱は、ダムロッシュが打ち立てた受容論である。「W文学」は世界各地で書かれた様々な文学の蓄積でも正典（キャンオン）でもなく、創造と受容からなる文学のシステムであるという認識から、本研究においては、テキストの分析だけにとどまらず、地域毎の受容や、一般読者から批評家、文学研究者に至る様々な階層の受容を丁寧に読み取るといったアプローチをとった。

モレッティは21世紀の「W文学」論が開始される、その端緒となった彼の論で、( 'Conjectures on World Literature' ) で、テキストの精読（クローズ・リーディング）にかわりテキストの遠読（ディスタント・リーディング）を「W文学」研究の方法論として提示している。テキストをきめ細かく分析してゆくのではなく、たとえば、あるジャンルの文学を総体として見る。言語の微妙な言い回しや文体を丁寧に読み込むのではなく、翻訳により作品全体のテーマやムードを一気に把握する。そして、一次資料のみならず二次資料からも情報を積極的に入手する。このような遠読を批判的に使いながら、多数の言語に翻訳され、多数の国で受容される村上春樹の文学の「W文学」性を推し量ろうとしたつもりである。

## 4. 研究成果

(1) 「W文学」理論を、研究期間に発表された論文・著作を含めて、かなりの時間をかけて、網羅的検証し、体系的にとらえ直すことができたと思う。「W文学」理論の検証の成果は、ヴェネツィア大学の学会発表とそれを元にした論文「Born Translated: World Literature before Japanese Literature」においては、エミール・アプターらの「W文学」批判や「翻訳不可能論」を批判しながら、「The Rise of Third World Literature: A Note on Japanese Novels from the 1990s to Today」においては、モレッティ、カサノバの「中心」から「周辺」への伝播論に歴史論的修正を加えることによって、十分に示すことができたのではないかと考えている。

「W文学」論のさらなる進展は考えづらい中、今後の課題としては、ダムロシュの著作を除き、ほとんど邦訳もなく、比較文学の方法論として、詳細な紹介や議論が未だ存在しない日本において、これをいかに定着させていくかであり、今後はこうした課題にも取り組んでいきたいと考えている。

(2) 村上春樹の作品の中で、海外において、特に、アジア諸国でもっとも人気のある作品の一つは、『ノルウェーの森』であるが、2010年時点で、世界 36 言語に翻訳され、260 万部を売り上げているという。海外の一般読者をはじめ、書評子、研究者、翻訳者による村上作品の受容を、文献や SNS や直接の聞き取りによって検証してゆくと、作品に惹かれる理由のうち、もっとも多いのはストーリー性、ついで、テーマ設定でることが分かった。

こうした結果自体、容易に予想されることでもあったが、さらに、なぜ村上作品のストーリー性や村上のテーマ設定に強く興味を惹かれるのか探求したところ、その背景として、状況描写を含むナラティブやテーマに、一般読者、書評子、研究者、翻訳者が強い親近性を感じている事実があることが判明した。海外で村上の作品は「日本文学」として、すなわち、日本のナショナル文学として読まれているのではなく、グローバルな「W文学」として読まれているのである。

本研究を通して、その受容を調査することができたのは、アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、韓国、(台湾を含む)中国、オーストラリア、ニュージーランドにおいてであったが、それぞれの国・地域において、僅かな差異はあるものの、受容は概ね普遍的なものであった。その中で、唯一、村上の作品に普遍性を認めず、非常に日本的なローカル性の存在を指摘したのは、日本をよく知る、あるいは、知っていることと確信している、ことに欧米の書評子、評論家、研究者たちであった。

現在、使用する言語や出身の国・地域に結びつけられることなく、世界で読まれている作家は村上春樹だけにとどまらない。そうした作家の作品は 1990 年前後から顕著に現われ始め、かつて文学の「中心」と考えられていたヨーロッパ以外、たとえば、日本やインドやアフリカや南米から出現してきている。上で紹介した論考 ‘The Rise of Third World Literature’ で私が主張したのは、従って、高度にグローバル化された世界における「W文学」は、19 世紀末の文学地図を基にした「中心」と「周辺」の関係の上に成り立つものではなく、文学の複方向的伝播を特色とする第三次「W文学」として再認識される必要がある、ということであった。

ちなみに、私が第一次「W文学」としたのは、19 世紀にゲーテやマルクス・エンゲルスが *Weltliteratur* と呼んだ、各国文学のことであり、第二次「W文学」は、モレッティやカサノバが想定した、英仏という 19 世紀後

半の文学的中心で生まれ、日本や南米などの文学的周辺に流れていった、主として探偵小説や写実主義、自然主義の文学のことを言う。

(3) 村上春樹の作品のいわば普遍的受容をもたらすには、それらにおける文化的リファレンスによるところが大であったと言える。村上独特の文化的リファレンスは、村上にとっては一・二世代前にあたる、戦後の日本人作家、谷崎、川端、三島、大岡らによる近代の古典的作品のテクストとの比較によってあぶり出したつもりである。アメリカのポピュラー・カルチャーを中心として構成されるグローバル文化が、村上の作品の主要な文化的リファレンス・ポイントであることは間違いない。また、文化的リファレンスに地域性を感じさせない、文化的無臭性は、村上にことさら顕著であって、これは同時代の作家と比較によっても明らかである。これは前述の ‘Born Translated’ で詳しく論じたつもりである。

さらに、グローバル化が進化した時代の第三次「W文学」は、村上の作品のような「無国籍型」と、たとえば、エレナ・フェランテのベストセラー『ナポリ物語』四部作のような「異国趣味型」があるが、後者は地方色を強く出しつつ、グローバルに受け入れられるための仕掛けがつけられている点において、イタリアの近代文学の古典的作品とは明らかに異なるのである。この点については前掲の ‘The Rise of Third World Literature’ において詳述した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 1 件)

森田 典正

‘Born Translated: World Literature before Japanese Literature’ *Transcommunication*, 5-3, 査読有 印刷中

[学会発表](計 2 件)

‘Born Translated: World Literature before Japanese Literature’ Lost in Translation Conference, at University of Venice, Cà Foscari, 131-15, October, 2016

‘From Rubble to Protest: Japan’s Postwar in Literature and Film’ British Association of Japanese Studies, at University of Sheffield, 5-7 September, 2018

[図書](計 1 件)

‘The Rise of Third World Literature: A Note on Japanese Novels from the 1950s to Today,’ in *Gegenwartsliteratur - Weltliteratur: Historische und theoretische Perspektiven*, Transcript, 2018 (印刷中)

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

早稲田大学 国際教養学部 教授

森田典正 (MORITA Norimasa)

研究者番号：50200423

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )